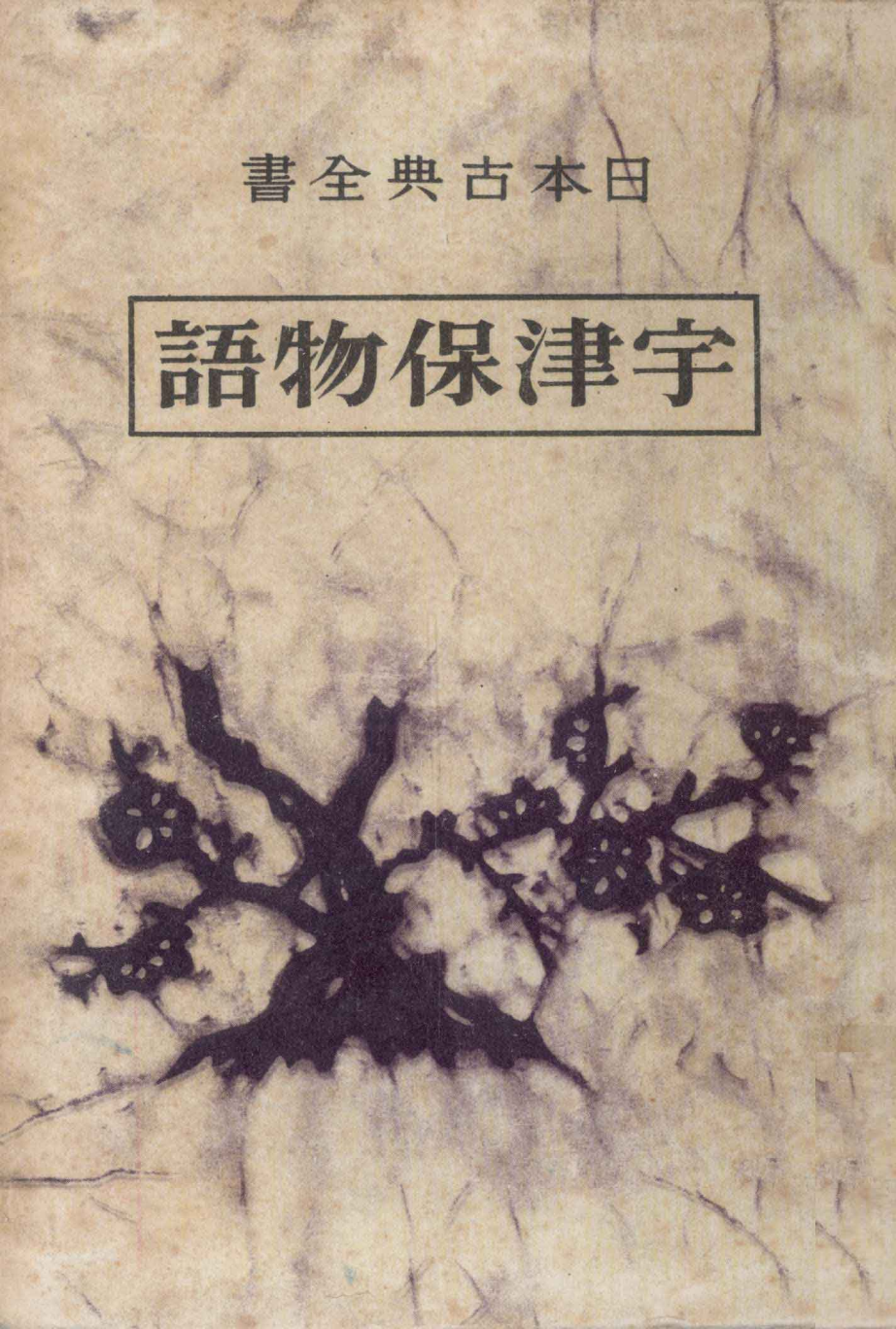
日本古典全書

宇津保物語



朝日新聞社編刊
日本古典全書

監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　藤村作　和辻哲郎

宇津保物語

校註　宮田和一郎

日本古典全書

昭和二十三年二月十日初版發行・昭和二十七年三月三十日第二版發行・朝日新聞社編刊・
日本古典全書「宇津保物語」（一）・校註者宮田和一郎・編集兼發行者東京都千代田區有樂町二の三朝日新聞社杉山胤太郎・印刷發行所東京都千代田區有樂町・大阪市北區中の島・小倉市砂津・朝日新聞社

定價　一二百八十圓

目次

口絵

解説……三

一　假名文學の時代……三
二　宇津保物語の題名……七
三　著作年代と作者……九
四　巻序……一一
五　本文の構成……一四
六　宇津保物語の盛衰……一七
七　本文の不備錯亂……一九
八　文學史上の地位……二一
九　諸本及び註釋書など……二五

梗概……二七

各巻にあらはれる人人……六九

一　俊蔭……六九
二　藤原の君……七〇
三　忠こそ……七二
四　嵯峨院……七三

凡例……七五

川越図書館

本文……七七

俊蔭……七七

一　清原俊蔭の生ひ立ち、その聰明……七七
二　俊蔭遣唐使に任ず、父母の悲歎……七八
三　俊蔭出發、波斯國に漂着、三人の人より琴を習ふ……七九
四　俊蔭斧の聲を尋ねて西に行く……八〇
五　俊蔭阿修羅より琴を得、栴檀の林にて琴を彈く……八〇
六　俊蔭春花園にて琴彈く、天女天降る……八四
七　俊蔭天女の教に隨ひ猶西に行く。仙人に琴を習ふ、佛過去未來の因果を示し給ふ……八六
八　俊蔭歸朝せんとて七人に琴を與ふ、十の琴に名を書きつく……九一
九　俊蔭最初の所に歸り三人に琴を與ふ……九二
一〇　俊蔭波斯國へ歸る……九三
一一　俊蔭歸朝し、一世源氏と結婚、一女を生む、式部大輔兼左大辨に任ず……九三
一二　俊蔭琴を所所に奉る、帝の御前にて琴彈く。琴の師たるべき勅を拜辭す……九四
一三　俊蔭三條京極の家にて女に琴習はす、治部卿兼宰相に任ず……九六
一四　俊蔭夫妻女に遺言して逝去す……九七
一五　俊蔭夫妻逝去後の女の窮迫せる生活……九八
一六　藤原兼雅賀茂詣での歸途俊蔭女の許にとまる……一〇〇
一七　翌朝兼雅立ち去りがたく思ひつつ女の許を辭す……一〇三
一八　兼雅行方知れず、大臣家の驚き、人人責められ探し出す……一〇六
一九　兼雅歸邸後父母の監視嚴しきに惱む……一〇八
二〇　俊蔭女懷姙に氣づかず、父母兼雅を思ひて歎く、兼雅も女を思ひて歎く……一〇九
二一　俊蔭女の懷姙を知りて媼まめまめしく世話す……一一〇
二二　六月六日仲忠誕生……一一三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

二三　後蔭女の窮迫せる生活、嫗吉夢を信じて俊蔭女を鬻ます……一二三
二四　仲忠三歳より乳飲まず聰明に育つ……一二六
二五　仲忠五歳のとき嫗死去、仲忠母子物食はず仲忠魚釣りて母を養ふ、天助あり……一二六
二六　仲忠母のために食物を求む、怪しき童仲忠を助く……一二八
二七　仲忠母と北山に移り、熊より杉の空洞を讓られて住み、母より琴を習ふ……一二九
二八　仲忠七つにて祖父の手を習ひ盡す……一二四
二九　仲忠十二、母子ともに美しく、猿に扶養せらる……一二四
三〇　東の敵來襲、猿の助に母子難を免る、母の彈く琴の音に山崩れ敵滅ぶ……一二五
三一　兼雅北野の行幸に供奉し、琴の音を尋ねて北方に入る……一二五
三二　兼雅仲忠に邂逅し、山を出でむ事を勸む……一二八
三三　兼雅山を出で再び供奉して京に歸る……一二四
三四　兼雅、仲忠母子の居所を用意し北山に迎へに行く……一二五
三五　兼雅昔を語り母子引き取りを納得せしむ……一二六
三六　兼雅仲忠母子を三條殿川に住ます……一二九
三七　仲忠學藝に長じ兼雅に愛せらる……一四一
三八　仲忠元服、主上春宮の御覺えめでたく侍從に任ず……一四二
三九　五節の試樂に仲忠御前にて琴を彈く……一四四
四〇　仲忠の才にめでて人人聟どらんとす……一四五
四一　習年八月兼雅相撲の還饗を催す……一四六
四二　正頼强ひて仲忠に琴を彈かしむ……一四九
四三　仲忠仲澄兄弟の約を結ぶ……一五一
四四　人人退出後、兼雅夫妻仲忠の才をほむ……一五三
四五　正頼歸りて還饗のさまを妻の大宮に語る……一五四

藤原の君……一五七
一　源正頼とその妻大殿の上および大宮……一五七
二　正頼の三條大宮の邸、君達及び聟の君達……一五八
三　君達方方に住み給ふ……一六一
四　源實忠あて宮に懸想しあて宮の侍女兵

衞の君を語らふ……一六二
五　兼雅あて宮に懸想し、あて宮の兄祐澄を語らふ……一六三
六　平中納言正明あて宮に懸想す……一六五
七　實忠兵衞の君を介してあて宮に文を送る……一六六
八　實忠兵衞の君を責めてあて宮に挑むこと更に切なり……一六七
九　兼雅・實忠・正明・兵部卿宮らあて宮に文を送れども何れにも返りなし……一六九
一〇　仲澄同腹なれどあて宮に懸想す……一七三
一一　上野の宮あて宮を得んとて陰陽師巫博打京童嫗翁を集めて畫策す……一七五
一二　正頼上野の宮の謀計を知り、とうりう寺の法會に贋あて宮を故意に奪はしむ……一八〇
一三　上野の宮あて宮を得たりと思ひて宴を催しまた神佛に報賽す……一八二
一四　三春高基の人となり、その吝嗇なる生活、致仕す……一八三
一五　高基あて宮を得んとて邸を新造しあて宮の侍女宮内の君を語らふ……一八九
一六　仲澄・實忠・兵部卿の宮・正明・彈正の宮らあて宮に文を送る……一九一
一七　良岑行正唐より歸り兵衞の佐となり樂師仕うまつる……一九四
一八　行正あて宮を得んとて顯澄に親しむ……一九五
一九　翌年春行正宮あこ君に託してあて宮に文を送る……一九五
二〇　滋野眞菅あて宮に懸想す、嫗媒せんとて忠澄の乳母長門を語らふ……一九七
二一　長門眞菅の文を孫のたてきをしてあて宮に屆けしむ、返事なし……二〇〇
二二　眞菅嫗が持ち來たれる長門の文を見て誤解し嫗を責め懲じ、誤解と氣づき許す……二〇一
二三　眞菅さらにあて宮の侍女殿守を語らふ……二〇三
二四　實忠・兵部卿宮・兼雅・正明・忠康・仲澄・行正らあて宮に文を送る……二〇三
二五　眞菅殿守の曹司に入りあて宮のことを語らふ、實忠に邂逅す……二〇八
二六　七月七日正頼家の女君たち賀茂川にて髪洗ふ、天の河を眺めて歌詠む……二一〇

二七　春宮・實忠・兼雅・正明・兵部卿宮あて宮と歌を贈答す。……二二四

忠こそ……二二六

一　橘千蔭の榮達、一世の源氏の腹に忠こそ誕生、父母の寵愛、母遺言して逝去……二二六

二　故左大臣忠經の一條の北の方千蔭に懸想し文を送る……二二八

三　千蔭心ならず通ふ、北の方千蔭の歡心を買はんことに熱中す……二三〇

四　北の方千蔭のため財を盡して貧しくなる……二三二

五　忠こそ一條北の方の義姪あこ君の許に通ふ千蔭北の方を疎んず……二三三

六　五月五日一條北の方忠こそその返歌を誤解し、忠こそを陷れんと博打を語らひ奸計をめぐらす……二三六

七　博打北の方の意を含みて帶を藏人所にて賣る、千蔭驚き怪しむ……二三八

八　千蔭平然語らず、北の方再び奸計、祐宗をして忠こそを千蔭に讒せしむ……二三〇

九　祐宗千蔭に讒す、千蔭信ぜず、祐宗失望して歸る……二三三

一〇　祐宗僞りて復命す、忠こそ宮中より退下父の不興、忠こそ鬱りて煩悶す……二三五

一一　忠こそ佛門に入らんことを鞍馬の山伏に語る……二三六

一二　忠こそおりめ風に歌書き殘し、梅壺と文を贈答し、出伏とともに出でゆく……二三八

一三　忠こそ出家、帝千蔭驚きて搜索す、帝千蔭を召す、陰謀の暴露、千蔭悲しむ……二四〇

一四　千蔭一條に疎し、北の方千蔭の文を沈め箱に入れて返す、千蔭も北の方の文を透箱に入れて返す……二四三

一五　千蔭思ひあまりて歌よむ……二四五

一六　一條北の方嘆きて文を千蔭に送る、千蔭の返事、北方の零落……二四六

一七　千蔭小野に隱棲、故君と忠こそのために法會を營む、千蔭逝去……二四七
嵯峨院……二四九
一　兼雅邸の相撲の還饗、仲忠仲澄を訪ふ……二四九
二　仲忠あて宮の侍女孫王の君に託してあて宮に文を送る……二五〇
三　春宮・兵部卿の宮・兼雅・正明・實忠・仲澄・行正歌をあて宮に送る……二五一
四　仲澄戀情をあて宮に傳へんことを八の君に託す……二五三
五　八の君仲澄の意中をあて宮に傳ふ……二五六
六　九月正頼邸の月夜の管絃、忠康あて宮八の君歌の贈答……二五七
七　正明正頼に春宮の花宴の樣を語る、饗あて宮を本物と信ずる上野宮の噂……二六〇
八　仲澄・行正・正明・兼雅・兵部卿の宮とあて宮の歌の贈答……二六三
九　あて宮、仲忠に目とどむ……二六七
一〇　春宮詩會のをり、客人たちに然るべき女を問はる……二六九
一一　春宮正頼にあて宮を約さる……二七〇
一二　正頼あて宮のことを大宮にはかる……二七二
一三　仁壽殿退出……二七三
一四　仁壽殿あて宮を春宮へ奉らんことをすすむ……二七四
一五　十一月正頼邸の神樂の準備……二七六
一六　神樂の當日、兵部卿の宮大宮に消息し對面す……二七九
一七　神樂の夜のさま……二八二
一八　仲忠あて宮を思ふこと切なり……二八三
一九　大宮嵯峨院大后の六十の賀の準備ず……二八四
二〇　正頼御賀の用意を君達や實正・忠俊らにはかり、舞を稽古せしむ……二八六
二一　年末の御讀經……二八八
二二　正明・實忠歌をあて宮に送る……二九〇

二三　新年、正頼邸の賭弓の饗宴の準備……二九一
二四　源仲頼の人となり、在原忠保の聟になる……二九二
二五　正頼邸の賭弓の饗宴、仲頼あて宮を見て心空に思ひなやむ……二九五
二六　仲頼の戀病、妻の嫉妬……二九七
二七　忠保仲頼を慰めまたむすめを諭す……三〇一
二八　后宮六十の賀に大宮嵯峨院に參る……三〇三
二九　正頼に召されて、仲頼病をおして賀に參る……三〇四

宇津保物語

宮田和一郎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

解　説

一、假名文學の時代

平安時代の初期は、奈良時代に引きつづいて、まだ大陸文化の模倣時代であつたので、文學も、弘仁期を中心とした漢詩文の隆盛期であつたが、その間に次第につちかはれてきた國民的自覺は、延喜天曆のころになつて和歌の興隆となり、さらに下つて一條天皇前後の時代には物語を中心とする假名文學の全盛期となり、ここにいはゆる平安文學の花やかな時代を展開するにいたつたのである。

上古時代の文學は、素朴簡古な男性的のものであつた。それが平安時代になると、優雅纖細な女性的の文學へとうつりかはつていつた。その原因は、平安の都が、優美典雅な山川自然の間にあつたといふことも、その一つにかぞへあげられるであらう。また、その美しい自然の間にはぐくまれて、花月を友とし、詩歌管絃を日常の遊びわざとした大宮人たちの生活のすべてが情趣的なものであつたといふことも考へられるであらう。それらとともに、それよりももつと深くそして直接的の理由のひとつは、假名といふものが新たに作られそれが廣く用ゐられたといふことであつたとおもはれる。いかにすぐれた思想でも、優麗典

川越図書館

雅な美的情感でも、それを自由に、委曲をつくして表現する途がなくてはよしないことである。そしてその目的に添ふために新たにうまれたのが假名文字であつたのである。とはいへ、當時の男性は、因襲的に漢學を學問とし漢文を綴つてゐたのであるから、かうした時勢の要求に基づいて創始された新文字も、かれらにとつては低劣いやしむべきものとしてかへりみられるにはいたらなかつた。さうしてゐる間に、女性は進んでこれを用ゐ、この新文字をもつてみづからのものと考へ、女文字・女手として獨占した。そして歌がしたためられ、日記がしるされ、隨筆がかかれ、物語がうまれた。なるほど平安時代には文學的天分ゆたかな多くの女性があつた。それらの女性が、持つてうまれたすぐれた天分を、遺憾なく發揮できたのは、なんといつても假名文字の恩惠であつたことを忘れることは出來ない。

げに平安文學は、假名文字による假名文學であるといつても過言ではない。その假名文學の主體は物語であつた。そしてその物語の傑出した作者は主として女流であつた。さうして平安時代は物語文學の時代であり、女流文學の時代であつたのである。

假名文字は男性によつて始めて作られたものであるが、片假名は別として、男性はそれにあまり大きな重要性をみとめなかつた。さうしたことがかへつて女性のためには幸福でもあつた。それが女性のものとされ、女性によつて巧みに活用されたからこそ不朽の名篇大作が後世に殘される結果になつたのである。とはいふものの假名が男性の創始であるだけに、假名文もまた男性によつて創始されたもので、物語の作者

もはじめはやはり男性であつた。物語のいで來はじめの親なる竹取の翁の物語でも、伊勢物語でも大和物語でもみな男性の作品である。いま傳はる男性の作品はさう多くはないが、散佚した物語として名だけ傳はつてゐるものだけでも決してすくなくはない。枕草子や源氏物語などよりも以前のものを拾つてみると、枕草子に見えるものに、梅壺の少將、埋木、音聞き、交野の少將、かはほりの宮、國讓、狛野の物語、住吉、道心すすむる、月待つ女、殿移、とほ君、ひとめ、松が枝、物うらやみの中將。源氏物語に見えるものに、交野の少將(枕にも)、唐守、狛野の物語(枕にも)、正三位、住吉(枕にも)、芹川、はこやの刀自。三寶繪詞に見えるものに、伊賀のたうめ、いまめきの中將、土佐の大殿、長居の侍從、などがあり、その他に見えるもので唐守(宇津保・源氏)、舍人の闈(宇津保・仲文集)、あとう物語(後撰集)、かもの物語(蜻蛉日記)、花櫻(赤染衞門集)などがあげられる。

これらのほかにも多くの物語のあつたことは、源氏物語に、繼母の腹ぎたない物語が多くあつたことがしるしてあるのでも明らかである。これらの物語のなかで、作者の男女を決すべきたづきは全然ないのであるが、物語の初期の作品は、やはり大方男子の手に成つたものと推定しても誤りではないとわたくしは思ふ。ところが男子の作品で傑作として傳へられるものがなく女流に名をなさしめた原因はどこにあるのであらう。ひとつはさうした方面に傑出した才能をもつた男子が出なかつたといふことにもよるであらうが、それよりもなほ大きな原因は、因襲や傳統の打破しがたいことは古も今もおなじことで、漢字漢文に

自信を失ひつつも、男子は體面上、假名に轉身するだけの勇氣がなかつたことにあるのであらう。それに、男子は最初から、假名および假名文にはほとんど關心がなかつたのであるから、その習熟によつて偉大な作品をものして一世をおどろかしてやらうなどといふ野心は毛頭なかつたはずである。ここでさらに他の方面から見る。物語はとかくわざとのものに考へられ、ことごとしいものにもいひ立てられるのであるが、「かかる世のふることならでは、げに何をか紛るることなきつれづれをも慰めまし」で、いはば後宮や姫君女房たちなどの、宵居や無聊のをりの慰めの具にほかならなかつたのである。世界の狭いかの女たちには、唯一無上のもてあそびぐさであつて、心を慰めるところも多かつたかはりに、その教養や身のしつけのうへにも甚だ大きな役割りをつとめたものであるから、「姫君のお前にて、この世馴れたる物語など、な讀み聞かせたまひそ」と、物語はその內容のうへから、いたく吟味され選擇して讀まされたものである。物語は女性の世界のものである。男子の入り立つまじきものである。さうした性質のものであるから、最初は男性によつて創始され育成されたにしても、もともと身を入れてのものではなかつたであらうから、さういふ點からも、傑作が男性の手に成されなかつたのは當然なことではなからうか。

ここで宇津保物語について考へる。作者こそわからないが、やはり男性の手に成るものであることはあらそはれない。竹取物語を繼承して、その傳奇的から源氏物語の寫實的への過渡期の作品である。散文と和歌との二大系統の合流、もつと具體的にいふと、いはゆる小說物語である竹取物語の系統と、歌物語とし

ての伊勢物語・大和物語などの系統との合體、その融合統一のうへに出來あがつたのがこの宇津保物語であるといつてよいと思ふ。世が下つてからは、あまり多くの讀者はえられなかつたやうであるが、村上天皇の女十の宮選子內親王から上東門院に、珍らしい物語がないかとのお尋ねに、門院は紫式部に、竹取や宇津保は讀みあきたから新たに作つて奉れとのお言葉があつたといふ。傳說であるかも知れないが、むげに根もないいつはりでもなからう。それに源氏物語には、宇津保の繪と竹取の翁の繪とをあはせて優劣を競つたとある。その邊の消息が思ひやられるとおもふ。多くの物語がつぎつぎとほろびていつたうちに、數奇な運命に浮き沈みつつも、いままでその命脈を保つて來たこと、それから思ひあはせて見ても、宇津保物語の文學的價値はおのづからあきらかであらう。

二、宇津保物語の題名

中古時代の物語や日記・隨筆などについて見ると、作者自身で自分の作品に最初から題名を與へておいたものは、ほとんどなかつたやうである。源氏物語のことは紫式部日記のなかにも見えてゐるが、あれも源氏を主題とする物語といふ意味で一定の書名としての呼び名ではない。竹取物語にしてもさうである。堤中納言物語の如きは異例であるが、一般に作品中の最も主要な人物や讀者に感興を與へる事件や、和歌や場所や顯著な語句などを取つて、誰がいつ名づけたともなしにその作品をその名で呼ぶやうになるのが

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c